國に多し、上古穴居野處の遺なるもの成べし、いはや山は備中也、

〔藻鹽草四〕窟

かさぎのいはや山しろ、物名、なにしおはゞつれはゆるぎのもみほの窟きの國志のすゝきくめのわかごもいましけるかぬかも、たてる松の木、みほのいはやはみれどあしづの窟おほなもちすくなひこなのおはしけるしづのいはやはいく世へぬらん志やうの窟志ぐ清見がたひとり窟　窟のとこ名所にあらず神の窟　ゑぞが窟　よし野の窟やまとみねの窟　おくの窟

こけの窟　露ふる窟　窟のほら

〔日本書紀一神代〕素戔嗚尊之爲行也甚無狀、〇略中見天照大神方織神衣居齋服殿、則剝天班駒穿殿甍而投納、是時天照大神驚動、以梭傷身、由此發慍、乃入于天石窟、閉磐戸而幽居焉、故六合之內常闇而不知晝夜之相代、〇略下

〔萬葉集三雜歌〕生石村主眞人歌一首

大汝小彦名乃將座志都乃石室者幾代將經、

〔閑田耕筆一〕萬葉集に、おほなむちすくな彦名の作けん靜の巖屋は見れどあかぬかも、とある志づのいはや、いづかたとも志られず、抄物にもいはれず、あるひは播磨の石寶殿をそれなりといふは、非なること論なし、然るに近年小篠道沖といふ人、石見國濱田侯の臣にて、京師逗留の日話せられし趣を傳きくに、其國邑知郡に靜窟といふもの有りゆゑに其鄉を岩屋村と號す、鏡岩といふもの、下に小社ありて、靜權現と稱す、〇略下

○按ズルニ、石寶殿ノ事ハ、尙ホ神祇部社祠篇ニ在リ、宜シク參看スベシ、

〔出雲風土記出雲郡〕宇賀鄉〇略中卽北海濱有磯、〇略中自磯西方有窟戸、高廣各六尺許、窟內有穴、人不得入、不知深淺也、夢至此磯窟之邊者必死、故俗人自古至今、號云黃泉之坂黃泉之穴也、

〔日本書紀七景行〕十二年十月、到碩田國、〇略中到速見邑、有女人、曰速津媛、爲一處之長、其聞天皇車駕、而